

道徳授業の「落とし穴」②

～「教師の思うような発言ばかりを求める」～

土田 雄一



1. 道徳授業の「落とし穴」から授業改善を

「落とし穴」は授業改善の視点でもある。今回は教師の発問と児童の発言に焦点を当てる。

2. 道徳授業の「落とし穴」③④

- ③教師の思うような発言ばかりを求める。
- ④「一問一答式」の授業。

この2点は日常授業でもありがちな「落とし穴」である。「指導案(台本)を意識」するあまり、教師が期待する発言ばかりを求める授業に出会うことがある。子どもたちも「教師が求める『正解』」を考えようとする。子どもたちの発言は「形式的」になり、「本音」で語ろうとしなくなる。本音が教師の求めるものと違っていたら困るからだ。

「一問一答式」の授業では、教師の求める「正解」がすぐに出れば出るほど、授業が上滑りに進み、深まりがなくなる。

- pattern①「指導案どおりに進める」ことを意識し過ぎる。(台本へのこだわり)
- pattern② 教師が思うように授業を進める。
- pattern③ 求めている発言には「消極的反応」をしがちである。

では、このような「落とし穴」に、はまらないためにはどうしたらよいのだろうか。

3. 「落とし穴」対策

①「主役はだれか」を考える

授業の主役は子どもたちである。「子どもたちの思考や意識の流れ」を第一に考えたプランなのか、それとも教師が求めるプランなのかを吟味する必要がある。「子どもの意識の流れ」を考えた授業づくりをしたい。

②教師が「受容的に聴く」

道徳の時間は、学力に関係なく、すべての子どもたちが自分の思いを表現できる時間である。まず、教師が一人一人の子ども意見の大切にした聴き方であることが基本だが、「正解」を求めるタイプの授業は「異なる意見に対して反応が冷やか」であるように感じる。「なるほど。あなた

はそう考えるんだね」「先生が気づかなかった視点だね」などの返しや「温かい視線」で発言を受け止めよう。教師の態度から伝わるメッセージは大きい。

③突っ込み・切り返しの発問をする

まずは、子どもたちの発言を受容した上で、突っ込んだり、切り返したりする発問をするとよい。「どうしてそう思うのかな。もう少し詳しく教えて」「では、別の〇〇の立場だったら、どう考えるだろう」などの発問を用意しておく。「期待した発言」が出てすぐには次に進まず、詳しく聞いたり、考えを深めたり、他の意見を聞いたりするとよい。互いの意見を聞き合うことで、子どもたちの思考は刺激される。

④他の子どもたちに問いかける

求める発言がすぐに出たり、「一問一答式」の授業になりそうときには、「他の子どもたちに問いかける」とよい。「他の人はどう考えるか?」「似ているか?」「理由は?」などを子どもたちに問いかける。教師はそれぞれの発言を聞き、整理する。ねらいから考え、必要に応じて発問をする。これは子ども同士で高め合う学習につながる。

⑤子ども同士の発言を関連させる

「一問一答式」の授業は子ども同士の発言の「つながり」がない。これは、他教科の授業でも同様であろう。「日常の授業で、子どもたちの考えを交流させる問いかけをしているか」を振り返る必要がある。子ども同士が高め合う発言が多い学級の道徳授業は「受容的」であり、「日常の授業でも同様の取組み」がされている。他教科の授業姿勢が道徳の時間に反映される。

4. 「ローマは一日にして成らず」

認め合い、高め合う授業は理想である。しかし、はじめからだれもができる訳ではない。その姿を目指して、「何をすべきか」自分の授業を振り返る必要がある。教師の受容的な受け応えと発問で、日常の授業も次第に変わっていく。教師が変われば、子どもも変わる。「落とし穴」は自分の授業を見つめ直す指標なのである。